

2018年度U13/U18ブロックDC 伝達講習資料

2018/12

JBA ユース育成部会

1. 都道府県育成センター選手選考方法論のモデル提示

- ・ 2019年度より都道府県育成センターの実施をお願いしている。
- ・ 選手選考を行うことが機能の一つであるが、その際の方法論について参考として頂きたく、モデル例として実施する。

2. 選手発掘の視点

- ・ 選手発掘の要素を知り、年代別（発達の程度が異なる）により視点を整理する

■ 選手選考を行う際にどのような視点を持つべきか？を考える機会

- ・これまで「身長の高い選手」を優先して発掘をお願いしてきた。
- ・「その世代で大きい選手を発掘すべきか？」
- ・特に男子代表において「サイズアップ」は重要課題である。
- ・代表に選出される年代（およそ20歳以降）において「高身長」であることが重要。
- ・選抜が始まっていく育成世代（12歳～16歳）において早熟の選手はその後身長の伸びが止まり、トップ世代での選出にそぐわないケースがこれまで見られた。
- ・強化的には「将来を予測しながら選手選考を行う」必要がある。
- ・身長が高いことは必要要素であるが、その他の要素は？
 - 身長＝「将来の最終身長」：体型、両親の身長、身長予測データ
 - 運動能力＝瞬発系：スプリント、ジャンプ力、チェストパス
 - 技術＝ボールハンドリング、シュート、状況判断力・・・
 - バスケットIQ＝戦術理解が必要（習っていない選手もいることに注意）
 - メンタル＝積極性、闘争心、向上心、リーダーシップ・・・

■ 実際の選手選考を行う際にどうするか？

1. 身長が高いことは大切な要素

- 努力しても変えられない要素であるため
- 将来最終身長が大きくなりそうな選手を見つける。
- その世代で身長高い選手は注目すべきであり把握することは重要。

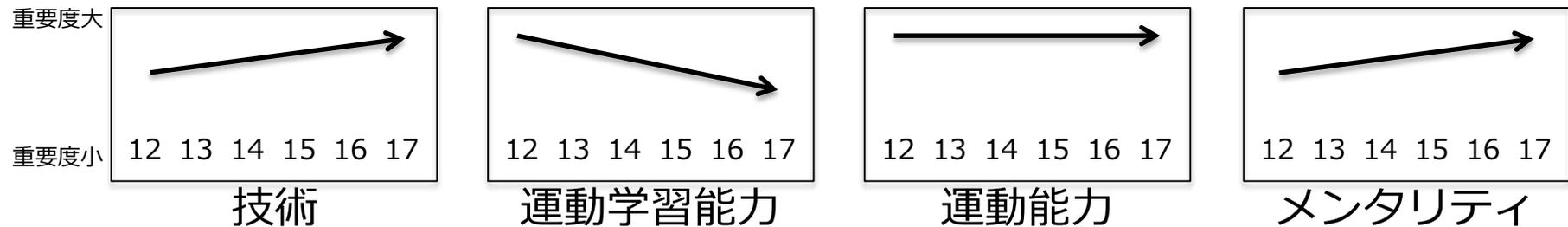
2. 小さい選手は必要ないか？

- PGは小さくても突出した能力があればやっていけるポジションである。しかし突出した能力が必要であることを十分考慮する必要がある。
- SG以降はできる限りサイズのある選手で代表は構成することが求められている。

2. 技術・運動能力・運動学習能力・メンタリティ

- 運動能力は重要要素：トレーニングでは獲得しにくい瞬発系，神経系。スプリント（加速）、ジャンプカ、アジリティ、クイックネス。
- 運動能力があれば技術が不足しても選考すべき（ただし若い時期、年を経るに従い技術レベルが必要となる）。
- 技術はトレーニングにより向上させることができやすい（運動学習能力との関係大）。
- 運動学習能力（コーディネーション）の高い選手は経験年数が短くても今後成長する可能性を多く持つ。若い世代で特に重要視する。若い世代で特に獲得すべき能力。
- メンタリティは重要な要素だが成長に伴い変化する可能性も考慮する。若い世代で重要視し過ぎない方がよい。

■年代により選考における重要度は変化する：完成年代への残り年数から考えて



■ 平均ではなく特別なものを持っているか？（シュート、スピード、運動能力・・・）

■ その選手の短所がどの程度の問題か、解決可能か？

→ 技術は解決可能か？

→ 運動学習能力は解決可能か？

→ 運動能力は解決可能か？

→ メンタリティは解決可能か？

★ 選考するべきと考えられる例（最終予測身長が高いと仮定し）

- ・ シュートが下手だが運動能力がある・・・練習によりシュートは上手になる要素
- ・ シュートが特別に上手いが、ディフェンスができない・・・成長に従いディフェンスができるようになる可能性有り

最終予測身長、運動能力、技術（運動学習能力、経験年数との関係有り）、メンタリティを成長段階を鑑みながら考える。

※ PGは特別な才能でサイズを凌駕できる場合がある。

■問題点

1. 早熟系の発掘が多く行われている傾向

ナショナル育成センターに発掘されている選手のPHVA（年間最大身長発育量）を調査したところ、男子11.9歳、女子10.4歳であった。日本人の平均PHVAは男子で13歳、女子では11歳であり、男女共に平均して1年弱の早期成熟の傾向が見られた。
この結果からは、ナショナル育成センターに推薦され選出されている選手は、成長が早いために選出されている可能性があることを示唆している。

2. 晩熟でまだパフォーマンスが低い選手は落とされている

PHVAが来ていないため身長が大きくない選手で、運動能力がある選手は、小さいため多くいる選手の中で埋没しやすいこと。
技術の高い選手も同様に、小さいため多くいる選手の中で埋没しやすいこと。

早熟と晩熟、最終予測身長を見極めることが重要

■ U13ブロックDCでの選手発掘

- ① 今は小さくとも将来高身長になる可能性の高い者
- ② 運動能力の高い者
- ③ 技術の高い者

■ 理由

- ・ 強化的視点では将来を見据えた選手選考が必要と考えるため、高身長者になりうる選手を優先して発掘することが重要。
- ・ 運動能力の瞬発系は先天的要因が大きい（スプリント力、ジャンプ力に優れる者）。
- ・ 技術は後天的にトレーニングにより向上が考えられる要素であるため。（よってこの年代では優先順位が低い）

■ 男女別の視点

<男子>

- ・ PHVAが始まっていないことが多いため、パフォーマンスの見極めに注意が必要。

<女子>

- ・ PHVAが男子より早いため、身長について男子より見極めがしやすいが、晩熟の選手もいる可能性を考慮する。

■ U18ブロックDCでの選手発掘

- ① 身長の高い者（将来身長が高くなる可能性のある者を含む）
- ② 運動能力の高い者
- ③ 技術の高い者

■ 理由

- ・ 国際的には代表で活躍する選手が出始める年代であり、代表選出確率が高くなければならない年代、強化的視点ではシビアな見極めが必要。
- ・ 運動能力に劣る（遅い、跳べない）者は技術が高くてもトップレベルでは厳しい。
- ・ 身長高く、運動能力の高い選手は技術が多少低くても可能性はある（13歳よりは可能性は狭まる）

<性差の視点の違い>

- ・ 女子はフェーズ4（身長の伸びが止まっている）に到達している選手の割合も増えるが、男子ではフェーズ3（終わりがけ）の選手が多い。
- ・ いずれも成長による変化は13歳頃よりは少なくなってきたため、小さくて今後身長が伸びそうな選手を期待することは少ない。

1. 形態測定
2. フィジカルテスト
3. コーディネーションテスト ★時間とリングがあれば実施
4. スキルチェック
 - 1) シューティング
 - 2) 1対1 オフェンス・ディフェンス
 - 3) リバウンディング コンタクト・ボールへの執着心など
5. プレー指導
 - 1) U13:ドライブ&キック (2対2, 3対3)
→オフボールマンのプレー:タイミング、スペーシング
U18 : オンボールスクリーンプレー (4対4, 指導時間があれば5対5)
→オンボールスクリーンとオフボールマンのタイミング、スペーシング
 - 2) トランジション・アウトナンバー
→2対1~2対2
→3対2~3対3
6. スクリメージ
 - 1) U13は3対3または4対4
 - 2) U18は4対4または5対5

1. コーディネーションテスト 数値化できないものは以下の3段階評価にて実施

プラス：うまくでき、確実である

ゼロ：およそうまくできているが、確実ではない

マイナス：うまくできない

2. シューティング

1分間、コーナー、45度、トップ、45度、コーナーの5カ所から3ポイントを5本ずつ
時間があれば打ち続けて良い。打った本数と入った本数の記録。

3. 1対1 オフェンス・ディフェンス

ドリブルスキル、スコアリング、ディフェンス力、集中力などがチェックできる

4. リバウンディング

コンタクトをいとわないか・ボールへの執着心・積極性などがチェックできる

5. U13:ドライブ&キック (2対2, 3対3)

プレー指導の後、スクリメージにて反応を見る

→ボールマンのプレー:適切なスペーシング、タイミングでアタックができているか、自分本意のプレーだけになっていないか、無理なショットセレクションを続けていないか

→オフボールマンのプレー:タイミング、スペーシングを考えながらプレーしているか

6. U18: オンボールスクリーンプレー (4対4, 指導時間があれば5対5)

プレー指導の後、スクリメージにて反応を見る

→オンボールスクリーン:ボールマン・スクリナーのアタックにおいて適切な状況判断ができているか

→オフボールマンのプレー:タイミング、スペーシングを考えながらプレーしているか

7. トランジション・アウトナンバー: 2対1~2対2, 3対2~3対3ともに

スピードドリブル, ドリブルからのパスなどスピードある中でのボールハンドリング能力

動きながらのボールコントロール、ボディコントロール、状況判断ができるか

6. スクリメージ

スコアリング能力、リバウンディング、アシスト、リーダーシップ、オフボールムーブ

ディフェンス力 (オンボール、オフボール:ポジション、ビジョン、予測:危険を察知する力)

その他ゲームに貢献する力